



One to One

Christmas

つけっぱなしにしておいたテレビは、いつのまにかバラエティ番組を終えて、合間にある3分くらいのニュース番組に切り替わっていた。

キャスターは、何かの被害にあった人たちが集団で告訴したニュースを報じている。

もしかして、俺もみんなにまとめて訴えられちゃったりして。

そんなことを考えて、俺は思わず頭を振った。

シャレになんないって～。

俺は手元の手帳にまた1本、線を引いた。

「あたし、その他大勢になるなんて、嫌だから」

きつつ〜い一言で、俺はバツサリと斬り捨てられた。

うん、ごもつとも。

俺は言い返す言葉も見当たらず、曖昧に笑ってごまかしてその場を終わらせた。

なんとなく手持ち無沙汰になって携帯を取り出して……いつもなら別の女の子を呼び出すところなんだけど、ついさっきそれで斬られたばかりだからね。

「……俺は忙しいんだよ、相葉」

それから1時間経って。

テーブルの向かい側に座った高校時代からの友人、サトシは無然としながら肘を付いた。

「ゴメンよ〜♪ だって、暇になっちゃったからさ〜。ここはおごるから、ね？」

手を合わせてみせる俺に、サトシは仕方なさそうにうなずいて見せた。

なんつって、ホントはサトシだってそんなに忙しくなかったくせに……。コール音が1回鳴るかどうかってタイミングで携帯に出るなんておかしいもんね。

「それでフラれたワケか。いつものことじゃないか」

「いつも、ってなんか引つかかるな〜。俺って、モテないくん？」

俺は手元のハンバーグをかじりながら、サトシのセリフに抗議する。対するサトシは、噛んでいたアイスティーのストローを口から放し、ふっと自虐的に笑った。

「モテないとは言わないが、結局は俺と同じだろ」

「サトシと同じい〜？」

「クリスマス前に、本命にフラれてる状況は、さ」

そうつぶやくと、突然、サトシは顔を覆った。あ、なんかめんどくさそうな予感……と俺が思ったときには、もう正面にある顔が崩れきっていた。

「そうなんだよ！ もうあと3日でクリスマスイブになるっていうのに、なんだって別れるなんて言うんだ！ しかも新しい男はパンクバンドのヴォーカルだって……全然、俺と違うタイプじゃん！ ホントは俺じゃ不満だったって、そういうことか！ ああっ！」

…呼び出すの、別のヤツにしとけばよかったかな…。

自分で言ったセリフで自分の傷を抉って愚痴るのはやめたほうがいいよ、うん…。

俺がかける言葉もなく黙々とハンバーグを口に運びながら嘆くサトシを見つめていると、テーブルに影が差した。

それに反応して見上げると、そこには似合わないエプロンをつけた深山が立っていた。赤と白のストライプで、胸のあたりにはこのステーキハウスのマスコットキャラクターが牧場らしき緑の芝生の上で牛と戯れているイラストが踊っている。

学校ではもっとも怖いと後輩からおそれられてる深山が、こんなふざけた制服で働いてるなんて mismatch すぎて、未だに慣れずに顔がにやついてしまいそうになる。

「おい。泣くならよそでやれ。他の客が引くだろうが」

「深山〜。だって、だって俺…」

ホントはうちの高校もバイト禁止だったような気がするけど、そんなことはお構いなしに、深山は週に3度はこのステーキハウスでバイトしている。最初は深山がこんな店で働いてるのが面白

くて様子を見に来ただけだったんだけど、これがなかなか旨いし落ち着くので、すっかり通いつめている。

「それにしても、珍しいじゃねーか、相葉」

「へ？ 何が？」

「おまえも女に逃げられたんだろ？ ま、日頃の行いだな」

そう言って口元に意地悪な笑みを浮かべる深山。

返す言葉もないです…。

まさに、フラれた理由がそれだったからな～。

「しょうがないから沙希ちゃんは諦めるよ。今から誰かつかまるかなあ…」

「バカが」

短く言った深山を見上げると、呆れ果てたように肩を落として俺を見つめていた。

「ったく、いつまでンなことやってるつもりだ？」

いつも明るい相葉くん。

っていうのは、俺の…まあ、モットーってやつかな。

こっぴどくフラれても、泣きたくなるほど辛いことがあっても、暗い顔してちゃ運気が逃げちゃうからね。って、別に変な宗教とかじゃないんだけど。

でも、今回の沙希ちゃんはかなりマジだったんだよ。それでフラれて、心から平気なわけじゃないって。

一人でいるのが嫌でサトシを呼び出して、深山の店に行って。

いつもの仲間に戻られたら、いつもの俺のキャラ演じて。

そうやってなんとか、ショック受けてる自分をごまかしてるんだよね。それが何かプラスになるかって言ったら、何もならないのは俺自身がよく分かってる。

深山なんかは勘がいいから、俺のそんな態度にもいい加減気付いてるんだろうけどさ。

やっぱり、それもそろそろ…終わりかな。

時間は十時過ぎくらいだったのかな。

前の夜に遊びすぎたおかげですっかり遅刻しちゃった日があった。まだ夏休み明けてすぐ、くらいだったんじゃないかと思う。

とにかく大幅に遅刻して学校に到着すると、沙希ちゃんだけが腕組みして俺を教室の前で待ち構えてた。

授業はその時間は自習になってたから、もしかしたら始まると同時にそこで待ってたのかもしれない。

もちろん俺も、自習になるってことを知ってたから堂々と遅刻していったんだけど。

「相葉くん、いま何時だと思ってるわけ？」

「え〜？ あ、ちょっと、時計が壊れちゃって…」

そうやって笑って誤魔化そうとする俺に、沙希ちゃんは表情を緩めることなく厳しく言った。

「ちょっと、いい加減すぎるんじゃないの？」

「や〜、張り切りすぎないのが俺の主義だから〜」

正直、苦手だった。

ほとんどの女の子は大好きなんだけど、沙希ちゃんだけはどうもやりにくくて。もちろん好きは好きなんだけど、学級委員なんかやっちゃって、ちょっとシャレが通じないというか…。それに、向こうだって俺みたいな軽いキャラはアレルギーに近いくらい拒否反応示されそうな気がしたし。

だもんで、俺は適当に愛想笑いをしながら彼女をかわして教室に入ろうとした。と、すれ違い様に彼女はつぶやくように言った。

「エンヴィー…」

「へ？」

「グッチでしょ、それ。もう少し早く起きて、シャワーくらい浴びてから来たら？ 女物の香水ぶんぶんさせて学校に来ないでよね」

「あらら〜。以後気をつけま〜す」

そう言って誤魔化して、教室に入る俺。

あれ…？

俺はそこで違和感に気付いた。

名誉にかけて言うけど、シャワーくらい俺も浴びてきてたんだから。彼女が嗅ぎつけたのは、制服に染みた僅かな香りだと思う。

沙希ちゃんって…マジメでお堅い学級委員なんだとばかり思ってたけど、意外と香水とか分かっちゃうんだ？ そりゃ女の子だから、多少は興味だって持つんだろうけど、俺の制服に僅かに残っていた残り香で、銘柄まで言い当てちゃうなんて。

確かに昨夜、一緒にいたコが愛用してたのはグッチのエンヴィー。

鼻がいいのかな…？

それが俺が彼女に興味を持つ第一歩だった。

「もう1回…話したいんだ。来てくれるの、待ってるから」

無機質な留守番電話の応答メッセージの後、そう吹き込んで、電話を切ったのが昨夜。

念のため言っておくけど、いくら俺が女の子みんな大好きだからって、留守番電話の機械の人までは好きになれないからね。

もう冬休みまでカウントダウンが始まっている。今の沙希ちゃんと俺の関係じゃ、学校がないと合わないレベルなんだから。どうにか発展させないと、このままなんとなく時間が過ぎていってしまうんじゃないかっていう不安があった。それに、冬休みのうちに他の男に取られる可能性だってゼロじゃない。学校での委員長キャラに惑わされがちだけど。

だから俺は賭けに出ることにした。

女の子はみんな大好き。それはいいと思う。それが俺らしさなんだったら。

けど、今の自分が好きなわけじゃないんだ。このままでいいとも思わない。もしかしたら、ただ変わりたいだけなのかな…って、ちょっと迷うところもあるけど。でも、俺をそうさせたのは彼女だから。人に変わろうって思わせるなんて、それはそんなに簡単なことじゃない。俺に変化をくれた沙希ちゃんは、まちがいなく特殊な存在なんだ。

そう、俺には沙希ちゃんの替わりなんて、いないと思うから。

もう日が落ち始めていて、教室の中は薄暗かった。まだ10月の中旬だけど、日没時刻はどんどん早くなっている。

忘れ物を取りに来た俺は、教室の中に佇む沙希ちゃんの姿に足を止めた。

香水の一件から数日経ったこの時、なんだか分からないけど彼女の存在が気にかかっていたのは事実。

俺はそっと彼女の方へと近づいて、そして息をのんだ。

「…相葉くん？」

はっと振り返った彼女の瞳からは、大粒の涙が流れていた。

俺、女の子の涙ほど弱いものはないんだよ～。みんなに優しくするのは、誰の涙も見ないように、って意味も含まれてるんだから。

かと言って、俺みたいな毎日女の子追いかけてまわしてるようなキャラのヤツが、涙見たくらいで動揺したなんてバレちゃ体裁が悪い。困惑したのを誤魔化すように、俺は頭をかきながら言った。

。

「や、忘れ物取りにきただけなんだけどさ…その、ちょっとなんか気になって…」

そういう俺を見つめていた彼女は、バッグから小さなタオルを取り出して目元をぬぐいながら、ふっと笑ってみせた。

その笑みが、なんだか俺の知っている沙希ちゃんじゃないみたいだったし、いつもの学校の女の子たちとも違うように思えた。

「そうだね、相葉くんなら話せるかも。聞いてもらっても…いい？」

「んん？ 俺で聞けることならなんでも聞くよ～♪」

相手が深刻そうで、涙まで流しているからこそ、俺は努めて明るく言った。

沙希ちゃんは静かにうなずいて、口を開いた。

「あたしね…彼と別れたの」

彼氏、いたんだ…。

確かに沙希ちゃん、彼氏くらいいてもおかしくないと思うんだけど、なんとなく普通の堅い学級委員のイメージがあったから、恋愛とかとは縁遠い気がしてた。

さすがに失礼だから、口には出さなかったけど。

「年上の人だったの。ちょっと気が弱いけど、でもやっぱり頼りがいもあったし、優しかった」

「うん…」

「仕事終わった後だからいつも夜になっちゃったけど、いろんなとこに2人で行ったな…。平凡だけど、あたしは楽しかったし、何より彼のことが好きだった」

「……」

それって、結構俺と同じ生活サイクルかも。

こないだの遅刻したときの彼女のセリフが脳裏によみがえった。こりゃ、ますます彼女には頭が上がないなあ…。同じように夜の時間を過ごしていても、彼女はきっちり遅刻せずに登校してたんだから。

「でもね、こないだ…知っちゃったの」

「知っちゃった？」



「彼、結婚してたの」

オウム返しに聞いた俺に、沙希ちゃんはさらりと言った。

「クリスマスの予定をね、さりげなく振ったの。そしたら様子がおかしくなって…問い詰めたら発覚したってワケ」

そこまで言って、彼女は自虐的な笑みを浮かべて俺を見つめた。

「笑っちゃうでしょ？ あたし、それまでぜんぜん、気付かなかったんだ」

いや…笑えないって。

クラスで1番マジメそうな学級委員の沙希ちゃんが、知らなかったとはいえ不倫って…。

「それで…別れたってワケか…」

俺が溜息混じりに呟くと、沙希ちゃんは首を横に振った。

「正直に言うとね、あたし…それでもいいと思った。だって、彼のことは好きだったけど、結婚するとか、そんなふうに考えたことも無かったし。彼が隠し事してたのはショックだけど、気の弱い彼が言い出せなかったのも想像つくし。それに、知ってからも別に罪悪感みたいなものもなかったし…」

そこまで言って、彼女はいったん言葉を切った。

もう僅かになりかけている夕陽に照らされた彼女の横顔は、思った以上に大人っぽく見えた。

「けど、知っちゃったから。何かあるたびに、優しい彼を見て、その裏側にある葛藤とか考えるのも嫌だったし…。どこかのタイミングで彼が奥さんとか家族を優先しなきゃいけない状況って、出てくると思ったから。その時、あたし自身がすごく虚しくなるのかなって考えて…」

そして彼女は、笑顔に向けて言った。

「だから次は、あたしだけを特別にしてくれる彼氏を見つけようかなって」

まだ高校生なのに、そんな大人な顔しちゃダメだよ…。

俺はその笑顔が、なんだか泣き顔みたいに見えて、自分までもらい泣きしそうだった。こう見えて、他人のヘヴィな失恋話とか、弱いんだよ。

「ごめんね、聞いてもらっちゃって」

「いやいや～。俺なんかでお役に立てたなら」

「友達とかにはやっぱり言えないからさ。相葉くんなら引かないだろうな、って」

そこで俺が出てくる理由がちょっと引っかかるけど、まあ本当に役に立てたんならよしとするか。確かに彼女、マジメではあるけど、クラス内でもそれなりに友達はあるはず。けど、こんなディープな話はしばらくかもなあ。だって、みんなは普通の高校生で、〇〇先輩がカッコいい♪なんて話ばかりなんだから。

「暗くなっちゃったね。…一緒に帰る？」

「ん～…。じゃあ、そうしよっか」

俺の提案に少し迷ってみせながらも、うなずく彼女。

つい、いつものように俺は笑いながら言った。

「さっきの話…」

「え？」

「キミだけを特別にしてくれる彼氏。って俺じゃ、ダメ？」

「論外。相葉くんて、一番、遠いところにいるじゃん」

笑みを浮かべながらも、バツサリ斬ってくれる沙希ちゃん。

うーん、ごもつとも。

とりあえず立候補するのが礼儀だと思ってたし、それにちょっと他の子と違う雰囲気になっちゃったのもあったんだけど、まあ…彼女の言うとおりであったのでそれ以上迫るようなことはしなかった。

俺たちは笑いながら、教室を出る。

お互いに心から笑ってたわけじゃなくて、それぞれ複雑な心境だったんだけど。

明日が祝日ってことを考えると、2日後に迫ったイブまでに会って話せるのは最後のチャンスかも。別にイブにこだわるわけじゃないんだけど、イコール終業式の日だから、やっぱり区切りというか。

ここんところずっと話せないでいたのは避けられてたから……？ って思ってたから、正直、来てくれないかもって思ってた。だから目の前に沙希ちゃんがいるだけで、運使い果たしちゃったりしてないよね？ って不安になったり。

「なんか勘違いしてるみたいだけど」

そして俺の考えてることを見透かしたかのように沙希ちゃんは言った。

「別にあたし、相葉のこと避けてるわけじゃないからね」

そう言えば、俺のこと呼び捨てで呼ぶようになったのっていつ頃だろう。あの、放課後で話した日からしばらくして、かな。

「ならいいんだ」

「ただちょっと、どう接していいかわかんないから、なるべく会わないように帰る時間ずらしたり顔見たら逃げたりしただけ」

それを避けてるって言うんじゃないのかな……。

でも、少なくとも毛嫌いされてるわけじゃないみたいで、ほんの僅かだけど希望が出てきたように思えた。

「それで話したいことって、なに？」

「いよいよ明後日だね、クリスマスイ…」

「そのことなら、ないからね」

クリスマスイブって言っただけじゃん！ ちょっとした時候の挨拶かもしれないのに！ ひどいよ、即答なんて…。

まあ、それが本題なんだけどね。

「ちょっと、クリスマスプレゼントがほしいなあって…」

「だから会わないって言ってるでしょ。ていうか、彼氏でもないのに、なんでプレゼントなんか…」

そう言いかけた彼女の目が、俺の顔で止まった。

あ～、気付かれちゃったかな。目立たないようにと思って髪で隠したりしてみたんだけど。

結果よりプロセスが大事だとか言う人がいるけど、少なくとも俺のこの件については、沙希ちゃんにプロセスは知られたくないんだよね。

「相葉、それ…」

「ほんの10分でもいい。いや、5分でもいいんだ。明後日、俺に時間をくれないかな。それが俺へのクリスマスプレゼント、ってことで」

それ以上彼女に突っ込まれないように俺は言いかけた彼女を遮り、言いたい事を一息に言い切った。彼氏でもないのにプレゼントなんか、っていう沙希ちゃんの言ってることはごもつとも。だけど、知ってもらいたいんだ。

……沙希ちゃんのおかげで俺が行動できた、ってこと。それだけ大きい存在なんだ、ってことを。

押し付けがましいのは承知だけどね。

どうやら教室はもう昼休みみたいだった。

俺がそのまま教室を通過して屋上へと上がると、11月の秋晴れが広がっていた。

このまま入ったら、また沙希ちゃんに怒られちゃうからね。

屋上で日当たりのいい場所を選んで、ごろんと横になった。午後までもう一眠りしよっかなあ…。ちょっと肌寒いけど、日の当たる場所なら充分、昼寝できる暖かさ。

そんなことを考えていたら、急にその日差しを遮る影が差したことに気がついて、俺は目を開いた。

「ありゃ…見つかったか」

「なにしてんの、まったく」

あの放課後の不倫告白を聞いてから、俺と沙希ちゃんは結構話すようになった。って言っても、俺が1人である時に沙希ちゃんの方から話しかけてくるのがほとんど。普段、俺が話しかけようとしても今までどおり冷たい対応をされる。

彼女いわく「学級委員としてのメンツがあるから、相葉みたいな男と軽々しく話せないでしょ」って言われた。俺のことなんだと思ってるの、って落ち込まないわけじゃないけど、確かに一理ある。マジメで怖い学級委員だから男子たちも渋々従うみたいな部分もあるわけで、俺みたいな軽い男と話してたら威厳がなくなっちゃうかもね。

「…また、違う香水なんだ」

ホント、よく効く鼻だね～。

俺は感心して彼女を見つめる。普通、そんなに分かるもんじゃないと思うけど。

「ダメ？」

「その調子で何人の女の子泣かしてるの？」

彼女の咎めるような口調に、俺は曖昧に笑って誤魔化した。

けど、彼女はそのまま俺の隣に腰を下ろして言った。

「気持ちは、分かるけどね」

「え～？ 沙希ちゃんも女の子大好きなの！？」

「バカ」

やっと厳しい表情を崩して、笑ってくれた沙希ちゃん。

ていうか、クラスでもめったにそんなふうに笑わないよね。そのことに気付いたら、なんだか嬉しくなってきた。俺ってば、結構レアなもん扱わせてもらってんじゃないの、って。

沙希ちゃんはふっと息をついて、さっき俺が目を奪われた空を見上げながら言った。

「でも、そんなことしてたって、何も変わらないよ」

「……」

たった一言だけ、しかもぜんぜん具体的じゃないんだけど、それだけで俺はハッとした。

この子には、もしかしたらバレてるかも。

「本当に好きになったとき、信じてもらえなくなっちゃうんだからね？」

「…沙希ちゃんなら、信じてくれるんじゃない？」

「とっかえひっかえ色んな子と遊ぶ理由を、分かってるから…？ 悪いけど、それとこれとは別」

とっかえひっかえってほどヒドくないつもりなんだけどな…。

俺は少し引っかかるものを感じながら、うなだれた。

「でもね…あたし、相葉のことが好きだよ」

あまりにも唐突に、しかもさらっと言うもんだから、あやうく聞き逃しそうになった。慌てて身を起こす俺。

「ホントに～！？」

「あんたの好きと同じにしないでね。あたしは、本気で好きだって言ってるの」

つつい、いつものテンションで進めようとしていた俺は、彼女の真剣な眼差しに思わず口をつぐんだ。

「好きになんかなるつもりなかったのに、気がついたら好きだった。だから、すごい悔しいんだよね」

「そんな告白アリ…？」

俺は反応に困って、頭をかいて見せた。

普通はさ、好きになれてよかったとか嬉しいとか言ってくれるもんなんじゃないの？

「相葉の彼女になれたら最高だな、って思ってる。けど、だからこそ、絶対つきあいたくない」

「えっ、ちょ、つきあいたくないの！？」

「うん。絶対ヤダ」

「それって告白…？」

「好きって伝える告白と、つきあいたっていう告白は別でしょ」

そう言われると、そうなのかなって気にもなるけど…やっぱり、いろいろと間違っていない？

さすがの俺も未経験の事態に、どうしていいか分からずに呆然と彼女を見つめた。だってさ、相手の気持ちは分かったけどつきあいたくないって言われて、この場合の俺のベストな行動って何？ ベストどころか選択肢すら見えてこないんですけど。

沙希ちゃんは立ち上がると、どこかから吹いてくる冷たい風に髪をなびかせた。

「あー、告白したなあ…」

ちよっとちよっと、一人でスツキリしないでよ～。

こっちはモヤモヤしたまんまなんだから！

「沙希ちゃん」

俺は立ち上がって、彼女の隣に立った。

できるだけマジメな顔で、って心がけたら顔が引きつりそうになる。それでも、普段とは違う雰囲気は感じ取ってくれたのか、彼女は怪訝そうに俺を見つめている。

「もうすぐクリスマスだろ？ 俺と一緒に過ごしてみない？」

「はあ？」

つ、冷たい反応だなあ…。本当に俺のこと好きだと思ってくれてる？

それにもめげずに、俺は先を続けた。

いつものナンパならともかく、告白までされたこの状況でこんなふうに分を急ぐなんて、本来は俺らしくないんだけど。でも、なんだか胸の内に焦りがあつたのかもしれない。

もしかしたら彼女は、俺の普段の時間どころか俺自身さえ変えてくれるかもしれない、そう感じていたからかな。

「まず、さ…一緒にクリスマス過ごして、それからつきあうかどうか考えてみるってのはどう？」

「あー、その他大勢になるなんて、嫌だから」

きつっ〜い一言で、俺はバツサリと斬り捨てられた。

うん、ごもっとも。

俺がどんなつもりかなんて沙希ちゃんが知るはずないし、俺がどんな毎日送ってるか知ってるんだから当然の反応だよ。

「そんなことないかも……よ？」

少し食い下がって見せようとする俺に、沙希は鼻を鳴らして言った。

「言ったでしょ。あー、次はあーただけを特別にしてくれる彼氏がいいって」

「あ、うん…」

「程々にね。これは友達としての忠告。じゃ」

なんだか居づらくなって、俺は曖昧に笑ってごまかす。彼女は足早に、それだけ言い残して立ち去っていった。

俺は手触りでそれと分かる、真新しい携帯を手を取った。

色んな種類が売ってたけど、とりあえず諸々の思いを込めて、色は白にした。

画面を開いて、メモリを呼び出す。

画面には「！」というマークと、その下に「登録されているメモリはありません」というメッセージ。

顔の傷が寒気に当たってひりひりと痛んだ。

なんでああいうときって「顔」にくるんだろ。まあ、ボディブローとか回し蹴りが飛んできて、それはそれでヤダけど。

俺は駅前のごみ箱に気付いて、そこへ近寄る。

「相葉！？」

ふいかけられた声に顔を上げると、そこにはサトシが立っていた。

「あれ〜、どしたのサトシ？ イブに一人でこんなところウロウロして…」

「いや…一晩泣き明かしたらスッキリしちゃってさ。もう1回、彼女にやり直そうって言おうと思って、昨日電話して呼び出したんだ」

それ、全然スッキリしてないんじゃないか…。

思わず突っ込みそうになったけど、諦めが悪いのはいいことだよ、うん。

第一、今の俺には何も言えないもんね。似たようなもんだから。

「おまえこそ、どうしたんだよ。手帳と携帯持って…あ、もしかしてまだ今日の相手が見つからないとか？」

「違うって。今日はね、2択しか残ってないから」

「2択？」

「彼女が来るか、それとも一人か」

そう言って、俺は手帳をゴミ箱に投げ込んだ。

ガコン、と音を立てて吸い込まれる手帳を、サトシは釘付けになったままで声をあげた。

「あ、おい、てちょ…」

「もう年末だから、いらないだろ？」

「そうじゃなくて、おまえのその手帳には、女の子の…」

立ち上がって、ゴミ箱の中の手帳と俺を素早くこうに見比べるサトシ。驚きをうまく言葉にできないサトシに、俺はふっと笑って言った。

「ぜーんぶ、お別れしてきたから」

「えっ？」

「こないだの夜から3日かけて、全員とキレイにお別れしてきました♪ おかげで、ちょっと睡眠不足…」

「お、おまえ…本当に相葉か？ そっくりさんじゃないのか？」

失礼だなあ…。

まあ、自分でもここまで思い切れるなんてビックリだけどね。

これで沙希ちゃんにまでフラれちゃったら、俺一人になっちゃうなあ…。

一人になりたくなくて、誰かそばにいてほしくて一けどその誰かが沙希ちゃんなら、もう他に何



もいらないと思えたから。

その想いでいっぱいになりすぎて、沙希ちゃんまでいなくなった時のこと、考えてなかった。周りが見えなくなるってよく言うけど、まさにそれ。情けない話だよ。

でも、女の子はいなくてもサトシとか深山がいるか。ちょっとむさくるしいけど。

「あ、サトシ。ちょうどよかった、携帯番号教えてよ」

「は？ 何故、俺をナンパするんだ…」

「違うって～！ 携帯、変えたからさ…あ、俺も番号教えるね」

「おまえ、ナンバーポータビリティって知ってるか？ あれはな…」

「知ってるけど、敢えて変えたの。その時、メモリもぜんぶ消しちゃったから…」

今にして思えば、消すべきデータだけ選んで消したほうが、長い目で見ると手間もかからなかったかもしれない。でも、こういうのって後先考えないうちに勢いでやっちゃったりするものだから。

「何があったんだよ？」

「色々ね～」

そう言って適当に誤魔化す。

だって、なんとなく恥ずかしいじゃん。本当はずっと、こんなふうにしたかった、なんて言えないじゃん。

番号を登録しあった俺とサトシは、そのまま駅前の小さなベンチに腰掛けた。

イブに男2人で、何やってんだろ…。

もし、サトシも俺も相手が来なかったら、2人でもんじゃでも食いに行くか…。イブのもんじゃ屋って、カップル少なそうだし。

「そういや…俺がメモリ番号1番でいいのか？」

うん、それは嫌だから2番に登録しておいたよ。

1番は取ってある。

沙希ちゃんが来てくれたら、まず番号を聞かなきゃ。その時のためにとってある。

来てくれなかったら？ その時は、1番は永久欠番かな。

どうせ学校で会うんだけど、それでもそれが俺なりの気持ちの整理。彼女が来なければ、もう俺から彼女の携帯に連絡することは2度とないから。

行き交うカップルを眺めて、俺たちはしばらく並んで座ってた。

経過する時間とともに、俺たちの口数も減っていく。寒くて口元が動きづらくなってきたせいで喋るのが億劫だったのもあるけど、何よりも不安が比例して増していく。来ないのは覚悟してる、なんて偉そうなこと言っても、やっぱり現実を見るのは怖いわけで。

どれくらいそうしてたのかな。

人ごみの向こうから、こちらへまっすぐ歩いてくる女の子が見えた。見慣れない女の子だな、って思ったらサトシがすごい勢いで立ち上がる。通り過ぎていく人達の中の何人かが不審そうに振り返っていた。

まったく、恥ずかしいヤツだな。と思ってたけど、少し遅れてこっちに続いてくる姿に、俺も同

じょうに立ち上がっていた。

俺も、恥ずかしいヤツだな。

口元にふっと笑みを漏らす。

街のどこかで流れるジングルベルが、俺たちを包むようにいつまでも繰り返し繰り返し流れていた。

クリスマスは今、始まりを告げたばかり—

**End**